

第40回 沼津市山口源新人賞が決定しました

要旨

戦後の日本現代版画界を代表する一人で、本市ゆかりの版画家・山口源を顕彰する目的で設けられた「沼津市山口源新人賞」の第40回目の受賞者が決定しました。

概要

1 目的・経緯

版画家「山口源」は、沼津市江浦のアトリエで生涯、作家活動を続け、国際的な版画展で多くの受賞歴を残しています。沼津市では氏の功績を顕彰するため、昭和58年の市制60周年を契機に山口源賞を制定し、国内の優れた版画家に対し授与しています。

毎年10月に開催される日本版画協会 版画展の作品から、一般社団法人 日本版画協会が審査を行い、「山口源新人賞」が決定されます。

2 令和5年度の受賞者と作品について

氏名	三宅 葵 (ミヤケ アオイ)
生年	1998年 (24歳)
住所/職業	大阪府大阪市 / 会社員
作品名	「2020.9.16 16:14」 (ニセンニジュウネン クガツ ジュウロクニチ ジュウロクジ ジュウヨンフン)
大きさ/版種	タテ124cm × ヨコ172cm / シルクスクリーン

3 受賞者のコメント (抜粋)

作品及びそのタイトルは写真を撮影した時の日付と時間です。この作品は私が制作してきた作品の中でも最も版数と色数が多く、231版196色の版と色を使用した1番手間をかけた作品です。

4 その他

この作品は沼津市に寄贈され、令和6年2月に沼津市庄司美術館で公開される予定です。

お問い合わせ先

沼津市教育委員会事務局 文化振興課
電話:055-934-4812

第40回沼津市山口源新人賞の決定について

1. 受賞作品

作品名 「2020.9.16 16:14」

(ニセンニジュウネン クガツ ジュウロクニチ ジュウロクジ ジュウヨンブン)

発表年 2022年

大きさ タテ124cm × ヨコ172cm

版 種 シルクスクリーン



2. 受賞者に関する事項

氏名 三宅 葵 (ミヤケ アオイ)

生年月日 1998年10月9日 (24歳)

住所 大阪府大阪市

出身 広島県

職業 会社員



・作品の由来とモチーフに対する思い

私は日々の中で何気なく撮影している自分の日常風景写真をもとに版画作品を制作しています。

物のコンポジションや影の形、明暗のコントラストなどが気に入った写真を選び、タブレットを使ってドローイングを描き、版画作品に展開しています。

写真からドローイングに展開する時、モチーフの輪郭や影の形を簡略化し、色面をパズルのように組み合わせて表現します。

パズルのように組み合わせた色面の色をひとつひとつ考え直し、全てに異なる色を配色しています。そのため私の作品は版数と色数がそれぞれ 60～100 ほど使われます。

今作品は大学院を修了する際に制作した修了作品で、友人が私の家に遊びに来てくれた時の様子を描いています。

作品のタイトルは写真を撮影した時の日付と時間で、私の日常風景作品のシリーズのタイトルは全てもとにした写真を撮影した日時をタイトルにしています。

この作品は私が制作してきた作品の中でも最も版数と色数が多く、231 版 196 色の版と色を使用した 1 番手間をかけた作品です。

4. 受賞のコメント

この度は名誉ある賞を頂戴し誠に光栄に存じます。ありがとうございます。

過去に制作した作品の中で最も思い入れのある大学院の修了制作である今作品が評価して頂けたことを大変嬉しく思います。

この春から社会人になり、慣れない新たな生活環境の中で隙間時間を見つけ、作品制作を行うことの難しさ、自分の作品への感覚が薄れないように意識を向け続けることの厳しさを日々強く感じています。

学生の時に比べ作品と向き合える時間が減ってしまった今の環境でも自分の中の意識と対峙し続けたいと思っています。

5. 主な画歴

個展

2022 「三宅葵 個展 -日常に潜む煌めき-」 Hideharu Fukasaku Gallery Roppongi 東京

2023 「三宅葵ミニ個展 -Mint Exhibition-」 吉祥寺ブティック村

ギャラリー貸し小屋東京

パブリックコレクション

2020 「エレベーターデビュー」 多摩美術大学 版画研究室

2023 「見つめる」 チャームスイート四ツ谷 東京

受賞歴

- 2021「第10回 FEI PRINT AWARD」 大賞
- 2021「第8回 山本鼎版画大賞展」 優秀賞
- 2022「第21回 版画絵はがきコンテスト」 優秀賞
- 2022「第8回 NBC メッシュテック シルクスクリーン国際版画ビエンナーレ」 入選
- 2022「第40回 上野の森美術館大賞展」 入選
- 2022「市民公募 夢美エンナーレ入選作品展」 入選
- 2022「第20回南島原市セミナーヨ現代版画展」 第3部門(一般の部) 南島原市文化協会賞
- 2022「第65回 CWAJ 現代版画展」 入選
- 2022「アートオリンピック 2022」 佳作
- 2022「第13回 大野城まどかぴあ版画ビエンナーレ 入賞・入選展」 入選
- 2023「第22回アートギャラリーホーム」 サンゲツ賞

6. 略 歴

1998 広島県出身

2021 多摩美術大学 絵画学科 版画専攻 卒業

2023 多摩美術大学 大学院 美術研究科 博士前期課程 版画専攻 修了

7. 審査評

第90回記念版画展 沼津市山口源新人賞 作品寸評 審査長 野口玲一

生活の澱が感じられない、この暮らしが始まってまだ間もないような軽やかさが画面を支配している。卓の上には缶ビール、紙のトレイ、スーパーのパックから開けられたままの食材、食材を取り出したばかりの袋、封を切った缶など無造作に広げられている。エプロンをしたままの人物がカセットコンロで調理をしている。鍋の蓋が床にひっくり返して置かれ、もう一人の宴のご相手はちょっと席を立ったという風情。同居している猫も食事にありついたそうだ。引っ越したばかりで日が浅いのか、同棲が始まったばかりなのか、ちょっと訪ねてきて料理をしているのか。描かれた事情をさまざまに考えさせられる。

なかなか巧みだなどと思わせるのは、こうした生活のディテールを描きながら、その素性を詳細には明かさない点である。菜箸を持った人物は髪の長い女性のようにだが、彼女が誰のために料理の腕を振るっているのかは分からないし、ここが一体誰の部屋なのかも判然としない。付き合い始めて日の浅い彼の部屋を訪れた彼女が、料理してあげているなんて想像したら失格。それは観る者の側にある物語で、画面にはそんなことはどこにも描かれていないのである。と言うより、そんな想像をはぐらかすように描かれている。身軽な生活を描きながら、観る者がそこに思い描く

先入観を宙吊りにしたまま事態は進んでいく。作者はむしろこうした生活の軽やかなありようをこそ称賛しているのかもしれない。

画面構成も巧みだ。床のマット、卓、鍋、トレーと画面の中で円が重なり合い織りなすリズムが美しい。全体に高い明度の中で衣服や鍋、鉢の柄など暗い色彩が画面を引き締めている。他の版種が持つような、版としての強い表現性が希薄な、どちらかという素っ気ないシルクスクリーンの表情が、こうした作品の内容とよくマッチしている。